



学校便り「尚徳」 5月号

第478号

鳥取大学附属小学校

平成24年5月21日

<http://www.fuzoku.tottori-u.ac.jp/~fusho/>

題字「尚徳」は、住川英明教授（地域学部）



新年度になって

校長 小枝 達也

新しい年度が始まりました。4月当、初寒かったり、風がとても強かったりと、天気予報ばかり気にかかる毎日でした。「爆弾低気圧」という言葉も初めて耳にしました。

そんな中、4月9日に平成24年度入学式が執り行われました。69名の新1年生が緊張気味の顔をして入学してきました。今年度から文部科学省主導による大学附属小学校の学級定員見直しにより、1学級35人となりました。学級定員が少なくなった分、一人一人の子どもたちに今まで以上に目が届くようになります。しっかりとした学力、生活力、社会能力を育てていきたいと思っています。4月25日から27日の2泊3日の「旅の学校」もみんな元気に参加しましたし、5月7日の「砂の学校」も力いっぱいがんばりました。一つ一つの行事を大切にしていきたいと思います。

今年度の学校経営につきましては、昨年度と同じとしました。まだ、達成できていないことがあるからです。特に新しいことをするのはなく、毎日の学校教育、学校生活の一つ一つを丁寧にやっていこうと思っています。

今年の冬に幾度となく見舞われた大雪の朝は、なるべくJRで出勤するようにしました。そして、登校途中の児童を見ておりましたが、なんと子どもたちは、私に気づかなくても、お行儀がよいのです。ところが、下校時には大きな声で呼び合って騒いだり、ふざけたりと、楽しそうではあるのですが、バスやJRの中では迷惑がかかるといった状態になります。

こうした実態が分かりましたので、今年度は帰りの会で「心を落ち着かせて」から下校をするということを徹底して指導しています。さあ、今度はこっそりと帰りのJRにも乗り込んでみようと思っています。

【本年度の研究について】

子どもたちが確かに思考を高める学び合い(2年次) ～教材研究を生かした授業実践～

本校では、各教科・領域において、授業を科学化するために「教材」「子ども」「教師」の三者の関係を視点とした授業構成と授業評価を行っています。子どもたちの学びを創るプロセスが授業であるならば、教師は子どもたちのよりよい学びを創るための支援者でなければならないと考えます。学びを創る主体者である子どもたちと、その子どもたちに寄り添う教師によって、授業は創造的なものになります。したがって、よりよい学びを創るための支援者となるために、三者の関係から授業を科学的に捉え直し、子どもたちの主体的な活動を柱に授業を構成しました。

一昨年度までの研究の成果と課題として、個の力の高さは感じるのですが、それを集団のなかで発揮する力をさらに高める必要があると考えました。また、附属校の研究では、「教育研究とはこうあるべきだ」という公立小学校が手本とするような提案性や、授業実践の本質に迫ることのできる教授理論に

基づいた確かな実践などが求められます。そこで、昨年度から、「子どもたちが確かに思考を高める学び合い」というテーマを設定し、研究を行うこととしました。

2年次の研究となる今年度は、以下の点にしばった実践を試みることとしました。

- ・各教科における、「現在、一般的に行われている教材研究の問題点や課題」を明らかにして、その課題の解消のためにどんな切り口で教材研究をするかについて提示する。
- ・「〇〇科における教材研究は、本来こうあるべきだ。」といった主張のもとに教材研究を進めて授業実践を行う。
- ・個の力を集団の高まりにつなげる効果的な教材研究のあり方を探り、明らかにしていくことで、子どもたちが思考を高める学び合いを目指す。

また、昨年度に引き続き、幼稚園との連携についても推進していきたいと考えています。

なお、本年度の研究発表大会は、平成24年10月20日(土)に開催を予定しています。



